

【研究論文】

大衆娯楽と近代社会における人間教育への一考察

—救世軍幻燈上映の日英比較をめぐって—

(平成 28 年 8 月 31 日提出, 11 月 4 日受理)

A Study of the Humanistic Education Using the Popular Entertainment in the Modern Society — Comparison of the British and Japanese Salvation Army Magic Lantern Show —

奈良学園大学人間教育学部人間教育学科

山本 美紀

YAMAMOTO Miki

Nara-Gakuen university

Faculty of Education for Human Growth

キーワード：社会教育, 救世軍, 大衆芸能, 幻燈, 音楽隊

Abstract : The prior study revealed that the Okayama orphanage Magic Lantern Brass Band, the Salvation Army Magic Lantern Brass Band and "Salvation Army Hymns had a mutually deep relationship with each other. In addition, by analyzing the repertoire of initial Salvation Army Hymnal, the author confirmed the following features of the Tune that had been adopted as the Japanese Tune.

1) Works adopted were popular and entertaining songs for the general public.

2) Works adopted had already been accepted by the masses as musical band repertoire.

So, this paper will examine the magic lantern slides the Salvation Army used (has used?) for social education, focusing on the optical lantern slides collection of the World Salvation Army history museum (WBC), based on the field work at the WBC in 2015. The results will provide a perspective on historical transition of the method for social inclusion using popular entertainment, along with nurturing social morality and considering educational point of view.

Keywords : social education, Salvation Army, Popular Culture, Magic lantern, Brass Band

1. はじめに

筆者はこれまで、石井十次による「岡山孤児院音楽幻燈隊」の活動の内実について調査研究を進め¹、さらにその影響を受けた山室軍平による救世軍音楽幻燈隊について「救世軍」の初期讃美歌集『救世軍軍歌 M29』『救世軍軍歌 M41』に注目して研究をおこなってきた²。

その結果、岡山孤児院音楽幻燈隊と救世軍音楽幻燈隊、また『救世軍軍歌』が互いに深い関係性を持ち、特に軍歌を中心に重なっていることを明らかにした。さらに初期救世軍軍歌集のレパートリーの分析に

より、日本製 Tune として採用された Tune について、以下の特徴を確認した。

1) 一般大衆に身近な、娯楽性の強い通俗曲であるということ。

2) すでに、音楽隊(楽隊)のレパートリーとして、大衆に受け入れられていた作品であること。

これらの結果と、山室軍平『平民之福音』の内容から認められるのは、救世軍の伝道姿勢が、キリスト教の教えに日本の習慣を近づけようとするのではなく、キリスト教の教えを当時の日本人の信心をはじめとした日常生活や、それを基盤に生じる思いに近寄せて語ろうとするものであった、ということである(山本

2016, 106)。さらに言うならば、キリスト教の神を中心としたところから発想される「罪とが」ではなく、まずは平民一般が認識している日常生活の不協和の要因として「罪とが」を設定し、その解消にキリスト教の信仰が効果的として、平民への伝道をスタートさせた。山室軍平のキリスト教伝道に、実際的な大衆への社会教育の視点があったことの証明でもあろう。山室の先輩であった石井十次自身、岡山孤児院の運営には「『国家の良民の育成』『神の業』としての慈善事業」の2つ意味があり（細井 2009, 119-121）、当時のキリスト教伝道に、社会教育的意識が同時に強く働いていたことがうかがえる。

特に日本近代の一般大衆（平民）については、飲酒の解消が社会的課題であった³。このような大衆にアプローチする手段として大きな役割を果たしたのが、大衆娯楽の要素の強い、立派な揃いのコスチュームを着て演奏する物珍しい「楽隊」であり、軍歌・唱歌であり、俗謡だったのである。それらと同時に消費されたのが、大衆娯楽の見世物的要素と学校や村の集会所での教育的要素を併せ持つ「幻燈」であった。

本稿では、救世軍が社会教育的に用いた「幻燈」について、特に世界救世軍歴史資料館(WBC)が所蔵する幻燈スライドについて、2015年に行った現地調査に基づき、検討を行う。それにより、当時の規範意識の育成とともに、教育的視点を考察すると共に、大衆娯楽を用いた社会包摂の手法について、歴史的変遷の視点を得ようとするものである。

2 救世軍(ロンドン)と幻燈

1) 救世軍の生まれた背景

「救世軍」は、1865年にロンドンのイースト・エンドの街角で始められた、社会福祉的活動を伴うキリスト教信仰を持つ団体であり、キリスト教としてはプロテスタントの一教派である。特徴としてあげられるのは、教会組織に軍隊式の階級制が取り入れられており、信徒が軍服を着用しているということであろう。この軍服と軍隊式の組織は、「この世」との戦いにおいて神の救いを実現する群れとしての信仰の証である。時代的には、後に見るように民族衣装をアレンジしたものもあるようだが、現在も世界中で同じ軍服が着用されている。当然ながら、筆者が当該資料館を訪れた際にも、関係者は制服着用で仕事に従事していた。

さて、創始者のウィリアム・ブース(William Booth

1829-1912)はメソジスト派の牧師であり、スラム化した当時のイースト・エンドにおける現代のソーシャル・ワーク的働きをキリスト教の具体的な救いの業として行った人物である。19世紀末のロンドンの貧困層について、チャールズ・ブース(Charles Booth 1840-1916)の行った社会調査「ロンドン調査」(1886-1902)をとりあげた論文⁴では、当時のイースト・エンドの状況を以下のように解説する。

1780年代の末、イギリスと西ヨーロッパ全体が経済的な不況に襲われ、80年代になると初めて「不況(Depression)」という語が使われるようになった。年の中心部に残ったのは、恒常的な貧困と厳しい失業に直面した「最下層民」であった。こうした下層民はスラム街に住み、病气、無知、狂気、犯罪の温床となった—中略—19世紀の大半を通じて、年における階級神尾境界線はハッキリと引かれていて、貧しい人々はイースト・エンドの労働者地区に限定され、住宅と職の有無が階級間の境界線をくっきりと目立つものになっていた。(小池／平野 2010, 105)

これがどれほどの貧困を意味するのか、現代日本にいる私たちには想像しがたいものがある。しかしながら、その状況は近代都市部のものとしては悲惨を極めたもので、「優生主義者のなかには、〔病气、無知、狂気、犯罪などスラムにまつわる〕これらの問題は手におえないので、貧民には子供を作らせるべきでないと思う者」や「貧困は人種全体の退化につながる」との主張がされるほどであった(同前)。

そのような中に、救世軍は社会活動を始めたのである。

2) 救世軍の幻燈

ロンドンの救世軍において幻燈が公式に投入されるようになったのは、1891年のことである。その年、ウィリアム・ブースの息子ハーバート(Herbert Booth 1862-1926)によって幻燈用のディスプレイがクリスタル・パレスに設置された。

救世軍の幻燈についてまとめたトニー・フレッチャー『救世軍とシネマトグラフ 1897-1929: 英国とインドにおける信仰の壁掛け』によると、1892年4月の『士官雑誌 The Field Officer』には、ロンドンの南東部のカンバーウェル Camberwell で行われた幻燈上演に、2000人の観衆が集まったことが報告されている(Fletcher 2015, 8)。それでも、最初、救世軍上層

部は幻燈の投入を渋った。「それ[幻燈]を使うことで、悪魔と手を組むことになる」というのである。しかし、後になって彼らは気持ちを変え、彼らの集会(Band of love Meetings)に接続して使用するため、規則を改めた(同前)。幻燈へのこのような警戒心は後々まで続き、単なる子供向けのお楽しみや、大衆娯楽のようにならないよう、使用に際して注意を払っていたという(Fletcher2015, 9)。

救世軍の幻燈の使用は、救世軍本部によって認可されなければならなかったが、平均して40～50の幻燈スライドが、各集会で用いられたと考えられている。初期に救世軍で使用が許された幻燈は、以下5つに分類される。

- ①国内外の救世軍の活動
- ②聖書の内容
- ③ヨセフ物語
- ④ドレの聖書物語 Dore's Biblical Pictures
- ⑤『天路歷程』The Pilgrim Progress

である。ちなみに、集会の入場料(鑑賞料というべきか)は、会員は無料でそれ以外は1ペンスだった(Fletcher2015, 8)。

1894年になると、幻燈スライドのセットが救世軍制作で売り出される(Fletcher2015, 9)。『オレンジ・ハリエットの生涯』『風の中の種まき(あるいは、再び悪い生活に戻った人の物語)』『ケイトの白いバラ』『イシュマエルの娘』『漁師カール』などの作品が、1894-1895年の売り出しのセットに含まれていた。中でも『オレンジ・ハリエットの生涯』は、30枚のモノクロスライドのセット(33シリング)と、28枚のカラーズライドと8枚の歌のモノクロスライドのセット(50シリング)という、2つのバージョンで売り出された。

このことから、『オレンジ・ハリエットの生涯』(資料1:以下『オレンジ・ハリエット』)が救世軍の中心的なメッセージを伝える、重要なレパートリーであったことがわかるが、残念ながらどのような物語であったのかは筆者は未だ知り得ていない。幻燈の研究においては、それに添付される詞書(日本の場合は<説明書>)がガラス製のスライドに比べて残存しているものが少ないと言われるが(小松2015, 103)、それがこの作品にもあてはまるのだろう。しかしながら、この『オレンジ・ハリエット』の上映状況から、物語のメッセージがどのようなたぐいのものであったかの推測はできる。

先に挙げた救世軍幻燈研究のトニー・フレッチャー

は、『オレンジ・ハリエット』の上映について、1895年2月の『社会報 The Social Gazette』に掲載された、ミルドレッド少佐 Major Mildred Duffによる幻燈上映会の記事を取り上げている。その集会はスラムで行われ、飲酒の害悪をテーマとしたもので、「甘く悲しい『オレンジ・ハリエットの生涯』が、スラム担当の救世軍管理者の優しく穏やかな声によって、人々の目や耳に語られた」という(Fletcher2015, 9)。集会には、身なりこそきちんとしているものの、酒の臭いをさせている女性や、随分酔って『オレンジ・ハリエット』の物語に興奮する元気の良い聴衆が集まっていたが、概して皆静かに聞いていたようである⁵。そして、同じ記事には『オレンジ・ハリエット』のレビューとして、観衆が物語に促されて決心していく様子がレポートされている。

デプトフォード・スラムの人々は、幻燈に導かれ、ダッフ少佐とそのスタッフ達から大変よい感化を受けた。『オレンジ・ハリエットの生涯』は、ダッフ少佐によって上演された。深くかつ長く印象づけられた。集会は外の4つのバブにも告知され、壮大な行進の後、楽しい時間が過ごされ、2つの魂が神に投降した。(Fletcher2015, 9)⁶

つまりこの『オレンジ・ハリエットの生涯』という物語は、飲酒によって苦勞する女性の姿を通して、社会と信仰を映し出すものであったことが推測される。禁酒運動は、救世軍の活動の大きな特徴であるが、それは単に、「酒をやめる」ということを目的としているのではない。そこには、当時の深刻な社会問題の根源に、飲酒による習慣的な害悪があるという受け止めがあり、禁酒をすることで、救霊を促し社会問題解決につなげていこうとする意図がある。

「スラムの住人」のコメントは、彼らが人生の物語の意味をそこに応用しているということを示している。「10以上の」人の心を動かす物語は、とても低くめられた、地位の低い人々の心に触れるのに絶大な効果がある。これらスラムの住人は、いずれのポイントでもその趣旨を直ちに読み取り、ハッキリと学んでいた。私たちは、そのような人々、つまりオレンジ・ハリエットと同様の境遇をもつ人々のもとに達しなくてはいけないと思う。そして、偉大な救いと同じ、不思議な働きを必要としている。(Fletcher2015, 9-10)⁷

私たちは汚れた隣人の惨めさや貧しさに目を止めるのに、幻燈というエンターテインメントの価値を理解した。幻燈集会は、魂の救いに助けとなるものであり、スラムに限らずびったりの方法である。(Fletcher2015,10)⁸

このように、救世軍の文書には、信仰的救いと社会問題の解決が同等に論じられている。またこのことから、彼らは社会問題の坩堝であるスラムにおいて、まずは人々へアプローチする手段として「幻燈」を用いたことがわかる。

3 日本救世軍の幻燈集会との比較

1) 幻燈集会の上映会

ロンドンでの幻燈上映会は、幻燈のみで構成されていたわけではない。幻燈集会では参加する子供たちが「野外で人々が歌うのを見、士官 Captain が力を持って立ち上がったとき、『幼き信仰』の歌を共に歌うのだ。」や、その場で信仰的回心を経験した人が「コンチェルティーナ（アコーディオン型楽器）の調べにのって、陽気なマーチで谷を下りていった。それは、美しい礼拝にふさわしい閉会であった。」(Fletcher2015, 9-10)⁹などといった記事からは、幻燈で音楽が用いられるのとは別に、音楽や讃美歌などを歌う時間が別にあったことがうかがえる。またそれは、司会者の指示によって、信仰的決意表明として前に出てきたり、共に歌を歌いながら集会から外に出て行ったりなど、何らかの身体的な動きが伴っていたようである。

それでは、日本の救世軍の幻燈集会はどのような構成になっていたのだろうか。

日本の救世軍の音楽幻燈隊の初陣は、1902 (M35) 年 2 月 11 日、横須賀で。同年 2 月 1 日付けの救世軍新聞『ときのこゑ』第 147 号 2 面には、「軍楽隊の編制」と題した記事が載っている。

この度救世軍に於て軍楽隊が編成せられ、幻燈を携へて東海道筋より中国、四国に推出す—中略—我が軍中に軍楽の進歩を見る一階段として之を喜ぶ者であり升。¹⁰

上記の記事を読む限り、救世軍での音楽隊の結成と幻燈は、同時に立ち上がったことがわかる。同じ新聞の 3 面には、以下のようにある

新たに倫敦から着したる幻燈の絵を見るに、大將ブース以下、救世軍の名将方の写真、様々の社会事業、貧民町事業の光景等、注意すべきもの多く、取分け有名なる出獄人スロツス爺の続き物の如きは、感動すべきものであり升。之に日本の救世軍各方面の写真等を加へて、立派な幻燈図画が調ひました。

ここからわかるのが、ロンドンの救世軍万国本営から新しい幻燈が届き、すぐに音楽幻燈隊が結成されたということである。また、そのレパトリーは、

- ①救世軍創設者であるウィリアム・ブースについて
- ②救世軍の実力者たち
- ③日英の社会福祉関係の活動
- ④物語

といったことになる¹¹。先に見たロンドン救世軍の幻燈の 5 つの分類と比較すると、③社会福祉活動と④物語が同じことがわかる。実際、救世軍国際歴史資料館において現存しているスライドには、①や②に関するもの、特に①のブース一族についての写真が非常に多い。ロンドンで救世軍の幻燈集会が始められてから、日本救世軍で幻燈集会が始められる 10 年の間に、社会福祉関係の活動とブース將軍やその家族が、救世軍の活動を社会に説明する上で、最も大きな位置を占めるようになっていったことがわかる。ちなみに、この時点での日本救世軍の幻燈のスライド数は 130 枚ほどであり、ガスによる光源の投影であった¹²。

一方、日本救世軍のプログラム構成は、約 1 年後の 1903 年 2 月 1 日『ときのこゑ』171 号年 4 面に掲載された広告(資料 4) から確認できる。

気がつくのは、例えば『オレンジ・ハリエットの生涯』などの「物語」が、見る限りにおいては無いということである。これだけを見て、日本の救世軍において「物語」が扱われなかったと断じるのは早計である。実際に、山室軍平記念救世軍資料館においては、物語であったと思われるスライドが確認されている(資料 2・3)。

残念ながら、『オレンジ・ハリエットの生涯』と同様、詞書は残っておらず、内容は不明である。おそらく上記資料 2 は、救世軍の活動の一部分を物語としたものであり、資料 3 は、聖書の言葉が付されている点から、聖書の教えを日本人にイメージしやすいように物語調にしたものだったのだろう(山本 2015)。

他にもプログラム構成からわかるのは、幻燈の上映が 3 部に分かれており、第 1 部は『大將ブース』『救世軍の起源外国の戦況等』と、「救世軍とは何か」に

ついて説明(宣伝)する内容であり、第2部が『諸外国に於る社会事業』『日本に於る社会事業の状況』という、社会事業を中心とした内容であり、第3部が『日本に於る救世軍の運動事業の実況』という、現在進行形の日本救世軍を説明する内容となっている。このうち、『大将ブース』『救世軍の起源外国の戦況等』『諸外国に於る社会事業』などは、先に示した①救世軍創設者であるウィリアム・ブースについて、②救世軍の実力者たち、③日英の社会福祉関係の活動、と同様の内容と考えられ、先に挙げた1902(M35)年年2月1日付け『ときのこゑ』第147号2面にある、「倫敦から着したる幻燈の絵」に一致する。おそらく、世界宣教に乗り出した救世軍幻燈集会の、世界的な共通点だったと推定される。

さらに、「奏楽」や「二人合唱」「四人合奏」「独吟」(独唱か詩の朗誦)といった、音楽に関する項目が並んでいることである。軍楽隊の結成にあたり、「私共は各救世軍人が尤と音楽に重きを置くことを望む、各小隊に尤と軍楽が盛んになることを願ふ」¹³と鼓舞されるのに答えたかのように「ロブソン少校を隊長とする軍楽隊の練習は漸く進み、今早や何所へ出しても恥ずかしくない腕前を鍛え上げました。」¹⁴とあるように、音楽的内容の充実が、幻燈集会にとって重要な側面を担うものとして受け取られていたと考えられる。

このことから推測できるのは、当時の幻燈の用いられ方と同様、一つのエンターテイメントとして成立していたと考えられることである。

2) 人々の反応

さて、1で言及したフレッチャーの研究では、ロンドンの幻燈集会人々の反応について、次のような記事を参照している。

彼らの顔を認識するにはあまりに暗すぎたが、彼らの熱心な関心を引くには十分な影響力があった。随分飲んで元気(いい調子)だった男性は、パブの主人が借金の形にハリエットの格子窓を持ち帰ったとき、大変怒って椅子を持ち上げた(Fletcher2015, 9)。¹⁵

二人の酔っぱらいー1人はハリエットの格子の件で怒った人物ーも同じように膝を折った[回心した]。

彼の声は、飲酒の奴隷となって酒焼けしたものだったにもかかわらず、広く響き渡った(Fletcher2015, 10)。¹⁶

彼らの内の多くは制服に身をつつみ、素晴らしく尊敬すべき見栄えとなった。しかし、少し前まで、私たちは彼らの幾人かを見ることができたろうか?ただ幻燈を聞いただけで、このように素晴らしい彼らの見栄えと、粗野でアルコール中毒の集団との間の大きな違いを予想できたろうか。実に、オレンジ・ハリエットを変えたのと同じ力が、スラムの人々の間に働いたので(Fletcher2015, 10)。¹⁷

このように、一例ではあるが、観客達の生き生きとした反応と共に、続々と回心へと導かれていく様子が感動的に報告されている。

一方、日本の場合は、救世軍の幻燈集会の後に交わされた会話をちょっとした物語調に調え、「幻燈音楽会の翌日」と題し『ときのこゑ』に掲載している。

客「奥さん昨晚は失礼いたしました。どうも大変な人混みでしたねエ。イヤ何うも救世軍には感心して丁ひました。よく先あ彼あ手広く、行き届いて人を救ふ為に働いたものですねエ、彼れが所謂神様のお助でせうよ。もう何も貧民救助とか、墮落した人間の救済は救世軍に限りますね。

主「本当に左様ですよ。私も昨晚帰りましてから、嫁とも然う申しましたので、救世軍のことを思へば戴く物や着物杯に贅沢などは出来ませぬ。少しでも儉約して娼妓や出獄人の救世に寄付しなければならぬ筈ですつてねエ。けれ共昨晚のお話しの中にもありました様に、罪深いものは娼妓や出獄人丈ではありませぬ。唯其日々々おとに心を用ふて、神様のとも靈魂のとも考へない私共も、矢張大罪人でゐりますから、早く救つて戴かねばなりませぬので、私しは昨晚本当に其事を感じましてー中略ー以来はに強う事に、朝は私しがお集會に参り、夜は嫁をやりまして、一緒に熱心な基督の信者になる積です。¹⁸

このニュース内容が、ある程度脚色されているのは当然のことである。『ときのこゑ』そのものが、本拠地イギリスにおいて活動報告であり、「救世軍」というメンバーシップを保つ役割を担ったのと同様のものであったからだ。

確かに『ときのこゑ』には聖書の物語や偉人物語が一面に来るなど、神の福音がダイレクトに語られ

る。しかし一方で、神の救いの働きとしての社会福祉事業や運動が、「救世軍」という一派を特定するメンバーシップを支える重要な要素であったことは疑いがない。だからこそ、日本救世軍内で少々翻案された形のエピソードが掲載されたのだろう。しかし、ここからわかるのは、日本救世軍の幻燈集会は、神の救いや福音が前面に押し出されたものというよりも、救世軍の働きが中心であったということである。それは例えば、本国での幻燈集会で「スライドが語る哀れな人々の姿は、スラムにおいては、真の姿である」(Fletcher 2015, 9)といったような、フィクションの物語に人々が自分を照らし合わせ、感動して回心するというのとは違うものである。

この上映内容の差として考えられるのが、「幻燈上映会」というものの社会的な受け止めの両国間の違いである。当時の日本でも、「幻燈」はエンターテイメントであり、大衆娯楽として成立していたことは先にも述べた。

そもそも「幻燈」は、日本救世軍が集会に用いるようになった1900年代初頭において、決して新しいメディアであったわけではない。日本で伝道活動に幻燈を一早く取り入れ始めたのは、組合教会系のジョージ・オルチン(George Allchin 1852-1935)だが、それさえ1890年代の初めであり、そう考えれば、ロンドン救世軍とはほぼ同じ時代であったことになる¹⁹。それまでにも、日本には100年の歴史を持つ「写し絵」の大衆娯楽文化があり、それが1874(M7)年に再渡来した西洋幻燈(マジックランタン)の観客となった。初期の頃には、「写し絵」が芸能・見世物・仏話・趣味・道楽などの娯楽を、「幻燈」が化学・歴史・地理・教育・道徳・衛生などの教育面を扱うといった、ジャンル上でのゆるやかな住み分けができていた²⁰。

そのような幻燈が流行したのは1870年代後半から1890年代と言われ、そのピークはちょうど日清戦争(1894-1895)の時代であったとされている(岩本2002, 165, 176)。明治期の幻燈の特徴としてあげられるのが、教育面での導入²¹と、このような「ニュース」報道に触れる場としての幻燈上映会である。「マスメディアによる視覚報道が発達する以前、幻燈は絵や写真の投影と語り手の説明によってニュースを伝えるメディアでもあった」²²との指摘にもあるように、幻燈でなされる「報道」は、大衆にとっては娯楽の延長線上にあったとも考えられよう。当時の幻燈スライドのコレクションには、「釜石市の惨状」など明治三陸沖地震の被害状況を伝えるスライドや、日清戦争や日露

戦争の戦況を伝えるスライドなどが多く見られることから、人々の日常において、幻燈上映会がニュース報道の場を担っていたことがわかる。その一方で「語り手の説明によって」伝えられる幻燈は、大衆娯楽の「写し絵」時代から、遣い手の「モバイル性や身体性」(草原2015, 28)と「弁士によって表現方法が変化すること」(土屋2015, 15)が上映時のエンターテイメント性において重要な部分を占めていたことは疑いなく、伝え方そのものが多様性をもち、ニュース内容と同等かそれ以上に、人集めを左右するものであったと考えるに難くない。そのような庶民の日常生活における「幻燈」の消費されてきた土壌に、日本救世軍が幻燈と音楽をもって乗り出してきたのである。

先ほども上映会のプログラムで確認したように、日本救世軍の幻燈集会では「大将ブース」「諸外国の戦況」など、使用されるのは日清戦争のニューススライドでも用いられたであろう用語である。社会事業や運動事業で映し出される貧困や飲酒を原因とした社会問題の救済活動もまた、震災などの被災状況を伝える当時の幻燈上映会の内容と重なるものであったろう。さらに、日清・日露戦争に関する内容は当時の幻燈上映会での重要レパートリーを占め、そこでは戦争の英雄談が語られるといった点も、軍隊組織をとる救世軍を説明するのに、キリスト教の教えを伝えるというよりも、一般の人々にとって比較的抵抗なく受けとめられたにちがいない。つまり、

①諸外国の戦況〔宣教〕が、日清・日露戦争の戦況に

②社会〔福祉〕事業の状況が、自然災害等の被災状況に

③救世軍の軍隊用語が、実際の軍隊用語に

それぞれ置き換えられて受容されたと考えられるのである。

このように、日本救世軍の幻燈集会は、すでにあった大衆娯楽の幻燈の受けとめの上に成立していた。それは、「ニュースをエンターテイメントとして見る習慣」を含むものであり、救世軍の社会事業の内容も、世界宣教の様子も、まずは強く娯楽的関心が働いた観衆によって支えられていたものだと言えるのである。

4 おわりに ー大衆娯楽と教育ー

3において、上映内容の差とその要因について、日本の幻燈文化の視点からみてきたが、最後にもう一つの視点、大衆芸能による社会教育から考えてみたい。

本拠地イギリスと日本救世軍の幻燈集会の大きな違いについて指摘できるのが、幻燈の対象としていた観客層の違いである。ロンドンでは救世軍の幻燈集会は、貧しい人々がいわば隔離された地域であったイースト・エンドで、「スラムの住人」にむけて行われた。

イースト・エンドで社会から排除されていた人々は、幻燈を通して「彼らが人生の物語の意味をそこに応用して」読み取り、自らを映し出される幻燈に投影し、「スライドが語る哀れな人々の姿は、スラムにおいては、真の姿」と受けとめた（Fletcher2015, 9）²³。それは、広い意味での芸術が、人々の内面をいったん外に出す作業であり、それにより他の人々と内面的世界を共有するプロセスが重要であることと共通する。つまり、ここで『オレンジ・ハリエットの生涯』は、大衆娯楽として消費されながら、その場の多くの人の状況を映し出し、真の姿を観る人々に示し、その力を発揮していたことが明らかなのである。

そのような彼らを見て、救世軍士官達は「人の心を動かす物語は、とても低くめられた、地位の低い人々の心に触れるのに絶大な効果がある」（Fletcher2015,9）²⁴とし、「私たちは、そのような人々、つまりオレンジ・ハリエットと同様の境遇をもつ人々のもとに達しないといけないと思う」（Fletcher2015,10）²⁵と体験的に直観したと考えられる。つまり、ロンドンの救世軍は、社会からいわば排除され、隔離された人々のもとに飛び込み、社会的課題に向き合っていくために幻燈を必要としたのである。これは、現代でいうところの「アウトリーチ」であり、隔離され、社会から排除された人々が、社会包摂されていく過程の前段階である。しかし、ここで重要なのは、アウトリーチの体験により、救世軍士官達自身が、その受け止めを変化させたという点である。

その後、先の引用にもあったように、回心したスラムの住人は信仰の証として制服を着用し、さらに救世軍メンバーとなって世話される側から世話する側に移行していくことにより、徐々に社会包摂が達成されていくストーリーが展開される。しかし、ロンドン救世軍のレパトリーに『風の中の種まき（あるいは、再び悪い生活に戻った人の物語）』があったことから、一旦スラム街に住むようになった者が、社会的に回復していくことは容易ではなかったことが想像できよう。

一方、日本の場合の幻燈上映の場所は、「神田の青年会館」²⁶や「羽衣座」²⁷（横浜）や各地の大きな教会堂などであり、ロンドン救世軍のように、隔離され

た地域で貧しい人々のために幻燈集会がもたれたふうではない。観客の対象も先の「客と主人」の引用にもあったように、救世軍の社会福祉事業の説明や後の廃娯運動や禁酒運動の実況など、もっぱら社会へ向け、困難な生活を送る人々の状況を周知し、そのような人々への注意関心を喚起し眼差しを獲得するものであった。つまり、ロンドンの場合とは違い、社会の一般層に向けて、国内外の救世軍の社会事業などの実況を通して現実社会の陰の部分の広く知らしめるものであったと理解できる。そしてそれは、大衆娯楽のメディアを通すが故にいつそうドラマティックに描き出され、大衆はドラマを見るようにして、社会の現実を認識することになった。日本で『オレンジ・ハリエットの生涯』に匹敵する、貧困層が自身を投影可能なドラマが幻燈で語られたのかは、実際にスライドが発見されていないので不明である。しかし観客とした層が違い、社会福祉事業の報告が上記のように示されたとしたら、そのようなドラマの必要性も低かったと考えられる。

救世軍が幻燈を導入し始めたころ、それが新しいメディアではなかったことは先にも述べた。事実、「横浜に手は其前後凡そ七八種の音楽会、慈善幻燈会の催あり、現に我軍の幻燈音楽会の前夜はしかも同じ劇場にて吉原の芸妓のプラス、バンドなどさへありたると云へば時機は決して最高の時機に非ざりしは明白」²⁸とあるように、「幻燈集会」といっても、すでにそれほど珍しいものではなかったことがわかる。廃娯運動を掲げる救世軍の幻燈集会の前日には「芸妓のプラス、バンド」さえ繰り出されるなど、幻燈はじめこの種の「見世物」的要素の強いものの中では、むしろ「後発」であっただろう。しかしだからこそ、日本救世軍は観客の中に既存の「幻燈への受けとめ」を利用することが出来たと考えられる。さらにこの点においては「私たちは無意識のうちに、新しいメディアは古いメディアが果たした役割をカバーし凌駕したからこそ反映したと思いがちだ。科学・技術の直線的な発展の結果として現在があるという進歩主義的歴史観の問題性は今日、多くの分野で指摘されている」（草原2015, 27）と言われることが、幻燈にも当てはまる。これまでにも見てきたように、幻燈には幻燈そのものが保つ受け手側の既存の認識と共に、幻燈にしかない「身体性」があり、「一体感」があった。向後が日清・日露戦争の幻燈について指摘するように、確かに幻燈集会は、娯楽と教育が強力に結びつく場であった。なぜなら、「幻燈会は、音と声を唱和」し、「映し出される一

つのイメージを集団が一心に見つめる」場であり、それによって集まった人々に「強力な紐帯の感覚と『国民的身体』の快楽を与える」場であったからだ。その力は、『オレンジ・ハリエットの生涯』が示したように、大衆娯楽をきっかけとした、社会包摂の働きを担うことができる。

現在、コンサートホールなどの文化施設や劇団やオーケストラといった文化団体が、地域社会のコミュニティ再生、あるいは貧困家庭の救済や外国人労働者問題などといった社会福祉における課題に取り組む姿勢を見せている。そのような「芸術による社会包摂」

<資料1>



<資料2>



を目指した活動は、決して一方向からのアプローチでは進まない。貧困のただ中に向かったの働きと同様、地域社会が目を向けようとしないところに光を当て、それらの認識を促していく働きが、同時進行することが必要である。それは、まさに「社会教育」であり、多様化とグローバル化が進む地域社会において、必須の教育でもあろう。ロンドン救世軍、日本救世軍の幻燈集会は、それぞれ働きかけるベクトルに違いがあったとはいえ、現代における芸術文化による社会包摂的機能とそのための社会教育を考えるのに、重要な示唆を含んでいる。

<資料3>



<資料4>

<p>二月十一日紀元節の夜七時より開會 本郷區春木町 中央會堂にて 集會の順序書</p>		<p>救世軍音樂幻燈會</p>	
一、奏樂	軍樂隊	一、特別廣告	救世軍の起原外國の戰況等
二、開會	軍樂隊	二、幻燈大將ブリス	ブリス大佐夫人
三、奏樂	軍樂隊	三、獨吟	ブラッド大佐夫人
四、開會の辭	ブラッド大佐	四、幻燈外國に於ける社會事業	日本に於ける社會事業の状況
五、二人合唱	同カッフェン君	五、奏樂	少年管樂隊
六、二人合唱	市ヶ谷監獄典獄	六、演說	幻燈日本に於ける救世軍の運動事業の實況
七、四人合奏	明治女學校長	七、演說	山室大校
八、二人合唱	同カッフェン君	八、二人合唱	同カッフェン君
九、四人合奏	同カッフェン君	九、二人合唱	同カッフェン君
十、奏樂	軍樂隊	十、二人合唱	同カッフェン君
十一、開會	軍樂隊	十一、二人合唱	同カッフェン君
十二、奏樂	軍樂隊	十二、二人合唱	同カッフェン君

【引用文献】

- Allchin, George, 1900. "For Young People : Preaching With a Lantern in Japan" . The Missionary Herald of the A.B.C.F.M. 1900 July, pp.297-300
- Allchin, George, 1900. "For Young People : Preaching With a Lantern in Japan" . The Missionary Herald of the A.B.C.F.M. 1900 July, pp.297-300
- Fletcher, Tony, "The Salvation Army and the Cinematograph 1897-1929; A Religious Tapestry in Britain and India" Local History Publications, 2015, London
- 岩本憲児, 2002. 『幻燈の世紀——映画前夜の視覚文化史——』森話社
- 小池俊彦 平野亮「＜測定＞の社会学：ケトレーとブース（１）」『鶴山論叢』第10号, 神戸大学 pp.91-115, 2010
- 小松弘「映画史研究における幻燈の意味」, 早稲田大学坪内博士記念演劇博物館編, 土屋紳一 大久保亮 遠藤みゆき編著『幻燈スライドの博物誌』pp101-104, 青弓社, 2015
- 向後恵理子「嗚呼聖代のをしへ草—幻燈のなかの戦争」, 早稲田大学坪内博士記念演劇博物館編, 土屋紳一 大久保亮 遠藤みゆき編著『幻燈スライドの博物誌』pp139-142, 青弓社, 2015
- 草原真知子「メディアテクノロジーとしての幻燈」早稲田大学坪内博士記念演劇博物館編, 土屋紳一 大久保亮 遠藤みゆき編著『幻燈スライドの博物誌』pp24-29 青弓社, 2015
- 土屋紳一「プロジェクション・メディアとしての幻燈」早稲田大学坪内博士記念演劇博物館編, 土屋紳一 大久保亮 遠藤みゆき編著『幻燈スライドの博物誌』pp13-16 青弓社, 2015
- 『ときのこゑ』
- 「軍楽隊の編成」1902 (M35)年2月1日付け第147号 2面
- 「青年会館に於る幻燈軍楽隊の初陣」1902 (M35)年2月15日付け, 第148号 3面
- 「横浜に於る幻燈音楽会」1902 (M35)年3月15日付け『ときのこゑ』第150号 3面

【参考文献】

- ・細井勇『石井十次と岡山孤児院』ミネルヴァ書房, 2009
- ・葛西賢太「救世軍の山室軍平と禁酒運動—自助努力, 社会事業, 宗教的救済のはざままで」『駒澤大学心理

学論集』第10号所収, pp79-87, 2008年

- ・早稲田大学坪内博士記念演劇博物館編, 土屋紳一 大久保亮 遠藤みゆき編著『幻燈スライドの博物誌』青弓社, 2015
- ・山本美紀「山室軍平『平民の福音』および, 救世軍所蔵幻燈用ガラススライドにみる近代日本における人間教育と宗教—大衆とキリスト教との出会いを巡る—考察—」『人間教育学研究』第1号所収, 日本人間教育学会, pp.65-72, 2015
- ・山本美紀「初期救世軍軍歌と日本製 Tune の登場—キリスト教の大衆化と近代日本キリスト教音楽文化をめぐって—」『ウェスレー・メソジスト研究』第16号所収, pp.81-108, 2016

注

- 1 岡山孤児院に関する研究著書
- 2 救世軍についての研究論文
- 3 「しばしば禁酒運動は, 単なる宗教的律法主義の誤解されるが, 我が国において明治大正期に宗教外の多くの人々を巻き込んだ世俗的運動であった。禁酒運動はその拡大につれ, 社会問題たる飲酒の解消から, 禁酒による生活の合理化に力点が移っていく。」(葛西 2008, 79)
- 4 小池俊彦 平野亮「＜測定＞の社会学：ケトレーとブース（１）」『鶴山論叢』第10号, 【91-115】神戸大学 pp.91-115, 2010年
- 5 「彼らは幼い信仰の姿に対し, 彼らはほとんど無言で向き合った。スライドが語る哀れな人々の姿は, スラムにおいては, 真の姿である」* フレッチャーによる『社会報 Social Gazette』からの引用 (Fletcher 2015, 9)
- 6 フレッチャーによる 1895 年の『社会報 Social Gazette』2月号からの引用
- 7 フレッチャーによる 1895 年の『社会報 Social Gazette』2月号からの引用
- 8 フレッチャーによる 1895 年の『社会報 Social Gazette』2月号からの引用
- 9 フレッチャーによる 1895 年の『社会報 Social Gazette』2月号からの引用
- 10 「軍楽隊の編制」『ときのこゑ』1902 (M35)年2月1日, 2面
- 11 「軍楽隊の編制」『ときのこゑ』1902 (M35)年2月1日, 3面
- 12 「二百五十燭光のアッセチリン瓦斯(ガス)は百三十枚の鮮明なる絵図を写して遺憾なく」(1902

- (M35)年2月15日付け『ときのこと』第148号3面
- 13 1902 (M35)年2月1日付け『ときのこと』第147号2面
- 14 1902 (M35)年2月15日付け『ときのこと』第148号3面
- 15 フレッチャーによる1895年の『社会報 Social Gazette』2月号からの引用。
- 16 フレッチャーによる1895年の『社会報 Social Gazette』2月号からの引用。
- 17 フレッチャーによる1895年の『社会報 Social Gazette』2月号からの引用。
- 18 「幻燈音楽会の翌日」『ときのこと』1902 (M35)年3月15日, 3面
- 19 オルチンの宣教報告には, 「この7年間というもの, 北は札幌から南は鹿児島まで, 私は日本中を, 幻燈を持って説教してまわりました。」とある。(Allchin 1900, 299)
- 20 教育面での幻燈の使われ方としては, 学校教育において明治13年ごろ文部省の推奨によって「教育幻燈」として師範学校に配布されたり, 同時期には夜学において掛図やテキストの代わりに用いられたりしていた(岩本2002, 127-139)。そして, 日清・日露の両戦争(1894年から1905年)を経て, 「幻燈は絵そのものが伝達や鑑賞の対象になるよりも, 集団で見える行為, 集団で聞く行為の共同体験が新聞・雑誌とは異なる場」をもたらし, 「識字率の低い集団や, 読書週間のない人々へのプロパガンダとして, あるいは地域者樹の連帯感を高める公的メディアとして, 幻燈は娯楽と教育とを兼ね備え」るようになっていったという(岩本2002, 66)。
- 21 早稲田大学坪内博士記念演劇博物館編, 土屋紳一・大久保亮・遠藤みゆき編著『幻燈スライドの博物誌』青弓社, 2015, 75頁。
- 22 早稲田大学坪内博士記念演劇博物館編, 土屋紳一・大久保亮・遠藤みゆき編著『幻燈スライドの博物誌』青弓社, 2015, 75頁。
- 23 フレッチャーによる1895年の『社会報 Social Gazette』2月号からの引用
- 24 フレッチャーによる1895年の『社会報 Social Gazette』2月号からの引用
- 25 フレッチャーによる1895年の『社会報 Social Gazette』2月号からの引用
- 26 「青年会館に於る幻燈軍楽隊の初陣」1902 (M35)年2月15日付け『ときのこと』第148号3面
- 27 「横浜に於る幻燈音楽会」1902 (M35)年3月15日付け『ときのこと』第150号3面
- 28 「横浜に於る幻燈音楽会」1902 (M35)年3月15日付け『ときのこと』第150号3面